



もくじ

展示紹介

- 「公益財団法人 松竹大谷図書館所蔵 3D浮世絵歌舞伎組上燈籠の世界」・・・P1
- 「歌舞伎組上燈籠の世界」・・・P2
- 「歌舞伎組上燈籠に残された舞台場面」・・・P3
- 展示紹介「広重の豎絵東海道勢ぞろい」・・・P4
- 浮世絵こぼれ話 ・・・P5
- ONIKAGE学芸員のページ／浮世場なれ／編集後記 ・・・P6

公益財団法人 松竹大谷図書館所蔵 3D浮世絵 歌舞伎組上燈籠の世界

会期 2018年11月10日(土)～12月9日(日)



「官原天神記車引組上ケ五枚続」組上完成形
作者不詳 明治35年(1902)
所蔵：公益財団法人松竹大谷図書館

このたび、藤澤浮世絵館では、公益財団法人松竹大谷図書館所蔵「3D浮世絵歌舞伎組上燈籠の世界」を開催します。今回の企画では、公益財団法人松竹大谷図書館のご協力をいただき、所蔵の歌舞伎組上燈籠の優品を展示させていただきました。

松竹大谷図書館は演劇・映画の専門図書館として昭和31年(1956)の設立以来、歌舞伎のみならず様々な舞台、映画、テレビなどの台本・文献・雑誌・写真・プログラム・ポスター等の膨大な資料を所蔵する日本でも有数の機関として知られています。今回紹介する「組上燈籠」は、往時の歌舞伎の舞台の様子を明瞭に伝える貴重な資料です。また、切り出して組み上げて楽しむ消耗品のため現存が少ないことが、貴重さを一層のものとしています。

今回の展示では、明治～大正期に出版された実物(切り出し前の平面作品)とともに複製を組み上げた完成形を展示します。浮世絵がもつ多様性をご覧いただくとともに、歌舞伎の舞台をより楽しもうと生み出した先人の想像力の豊かさに思いを馳せていただければ幸いです。

歌舞伎組上燈籠の世界



「忠臣蔵討入組上五枚続」組上完成形
作者不詳 大正2年(1913)
所蔵：公益財団法人松竹大谷図書館



同上(部分)炭小屋から引き出された吉良上野介
役者は市川段四郎

彫工も摺師も老練の名工が追い追い減少、そのうえ物価騰貴で三枚続き普通十銭、上物十五、六銭で売ったのが倍以上でも引き合わず、随って仕事もいい加減になり、絵具も安物、せいぜい子供のおもちゃ絵程度、その中で夏向きの組立灯籠画などはしゃれたものの一つ、これなどは今あっても面白だろう。」と記しています。

組上燈籠は、本来は上記の文中にもあるように、室内に置いて明かりを入れて眺めたもののようですが、歌舞伎組上絵は舞台を背景まで含めて再現したため、ひと組に浮世絵数枚を要し、かなり大型化しています。

今回の展示では、組上燈籠の完成形の作成を市内の大学の学生が担当しましたが、それぞれの作品に摺り込まれている小さく明確とはいえない「出来上り図」から舞台をイメージしながら組み立てるのには頭を悩ませた様子でした。その様子からも、これはとても子どもの遊びではなく、歌舞伎の舞台を思い出しながら画を切って貼り付けていく、大人の遊びだったのだらうと思います。



「和田酒盛草摺引の図組上四枚つづき」
組上完成形(部分)
曾我五郎 役者は市村羽左衛門
作者不詳 大正5年(1916)
所蔵：公益財団法人松竹大谷図書館



「め組のけんくわ組上とふろう」組上完成形
歌川国貞 明治期
所蔵：公益財団法人松竹大谷図書館



「歌舞伎座浄瑠璃奴組上三枚続」組上完成形
梅堂(五代 歌川国政) 明治26年(1893)
所蔵：公益財団法人松竹大谷図書館

「組上燈籠」とは、江戸期から大正期頃まで広く流行した浮世絵です。立版古などとも言い、一枚摺りの子ども用浮世絵である「おもちゃ絵」の一種です。画題は、歌舞伎の芝居、舞台や風景、名所、風物などが主であり、鑑賞するだけでなく、絵の中の部品を切り出して立体に組み立てて遊ぶ、いわば現代のペーパークラフトのように楽しめるというものです。

歌舞伎は江戸庶民の娯楽の筆頭ともいえる存在で、舞台の一場面を描いた芝居絵は、上演のたびに発売され人気を呼びました。明治になると、芝居絵は絵葉書(写真)の「プロマイド」に取って代わられるようになり、「おもちゃ絵(組上燈籠)」は明治の浮世絵師たちの最後の仕事といっても過言ではないようです。山本笑月(ジャーナリスト)は『明治世相百話』(昭和11年(1936)刊)のなかで、明治20年代初頭の思い出を「ことに(浮世絵の)

歌舞伎組上燈籠に残された舞台場面



「頼朝富士之牧狩仁田四郎功名之図組上ケ五枚続」組上完成形

歌舞伎組上燈籠の特徴のひとつに、現代の歌舞伎では、いまや上演されていない演目や舞台場面が残されていることがあげられます。ここでは、組上燈籠の作成手順も紹介しつつ、幻の舞台場面「頼朝富士之牧狩仁田四郎功名之図組上ケ五枚続」(所蔵：松竹大谷図書館)、およびその場面の後日譚とも呼べる「明治座新狂言 富士の人穴」(所蔵：藤沢市)の組上絵を紹介します。

「頼朝富士之牧狩仁田四郎功名之図組上ケ五枚

続」の元となる話は、『吾妻鏡』(鎌倉幕府の成り立ちを記した歴史書)に記された、源頼朝が建久4年(1193年)に富士の裾野で行った大規模な牧狩(鹿や猪を狩ること)にあります。江戸時代の人々にとっては大流行した歌舞伎の「曾我物語」(鎌倉時代の仇討ち話)のエピソードで記憶されました。この組上燈籠では、暴れ猪が頼朝に突進し、すんでのところ家来の武将、仁田四郎が猪を倒す勇壮なシーンが取り上げられています。さてその仁田四郎、時が過ぎて建仁3年(1203)鎌倉幕府二代将軍源頼家の富士の牧狩の際に発見された人穴探索に入ります。その時の様子を『吾妻鏡』では、同行した従者4人が突然死したと記されており、『御伽草子』(鎌倉時代末から江戸時代にかけて成立した民話集)にも記されており、異郷、地獄巡歴物語として広く書物などに記され、江戸時代の富士講(富士山信仰)の隆盛とともに広く流布されました。

「明治座新狂言 富士の人穴」の組上燈籠は、仁田四郎が人穴探索中の場面です。この後、室町時代に記された富士の人穴物語では、仁田四郎が江の島に抜け出て、富士山と江の島が人穴でつながっているという不思議な話へと展開していきます。



「頼朝富士之牧狩仁田四郎功名之図組上ケ五枚続」
作者不詳 明治30年(1897)
所蔵：公益財団法人松竹大谷図書館

元は5枚組の木版画(浮世絵)です。この細かく描かれた絵を切り出して、組上げていきます。



「明治座新狂言 富士の人穴組上三枚続」組上完成形：(部分)
作者不詳 明治34年(1901)



切り出した部分を組み上げていく。これは源頼朝、役者は九代目市川団十郎。



完成予想図を元に配置を決めていく。



草などの細かい部品を配置して、もうすぐ完成。



「神奈川 台の茶屋海上みはらし」

今回の展示では、歌川広重の「五十三次名所図会」通称「豎絵東海道」(安政2年[1855])を紹介します。55点の揃物(シリーズ作品)の浮世絵で、その全作品を展示します。

「豎絵東海道」は広重晩年の傑作として人気が高く、広重が最後に描いた風景画としての東海道五十三次シリーズです。このシリーズの最大の特徴は、通称どおり、その縦の構図にあります。伝統的な山水画のように、対象を近景、中景、遠景とし画面上部に積み上げていく描き方により、空間に奥行きを生み出し、まるで上空から見たような俯瞰的な構図を完成させています。広重には他に横の構図での優れた東海道五十三次シリーズとして、「保永堂版」、「隷書東海道」、「行書東海道」がありますが、これらの作品は天保年間(1830-1844)から弘化年間(1844-1848)に描かれています。

縦構図は、大判錦絵としては、東海道五十三次シリーズとならび人気が高い「六十余州名所図会」(嘉永6年[1853])から多く描かれるようになり、嘉永6年以降は「名所江戸百景」(安政2年[1855])などを含め、風景はほぼ縦構図で描かれました。

広重は生涯で東海道五十三次の揃物を20作品以上描いたといわれています。その画業の歴史の中で、横構図から縦構図と変わっていく理由は定かではありませんが、進取を賞ぶ浮世絵の宿命の中で、広重が新しい画風を模索し、縦構図の風景画の確立を目指したことは確かだと思われます。またその画面の完成度の高さからは、広重が風景画の名人と称される理由がじわりと伝わってきます。



「平塚 馬入川舟渡し大山遠望」



「江尻 田子の浦三保の松原」



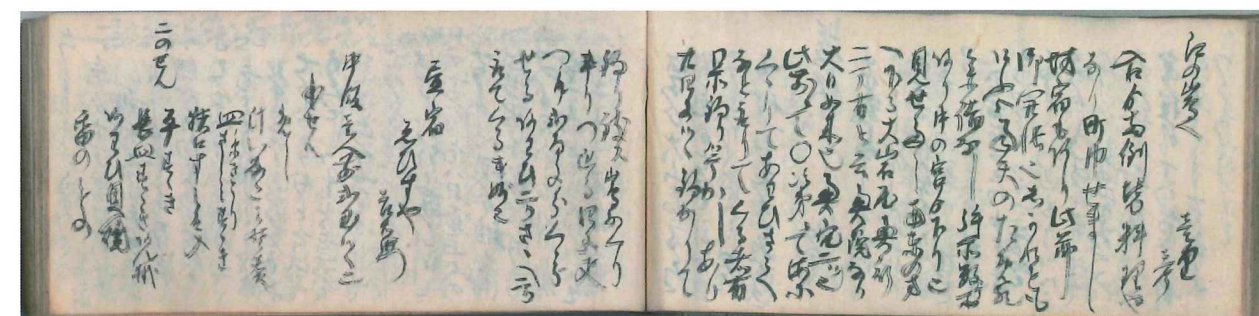
「京 三條大はし」

郷土資料で紐解く浮世絵の世界

藤澤浮世絵館では、浮世絵のほか郷土にまつわる地図や古文書なども多く所蔵しており、浮世絵の展示に絡めて展示する機会が多々あります。今回紹介するのは「やじきたが来た！見た！食べた？ 藤沢・東海道の名所と名物」展示期間(9月8日～11月4日)の展示で出展した「道中日記」です。江戸時代の旅行者がその道々で記した日記ですが、これを紐解くと浮世絵鑑賞のヒントをたくさん見つけることができます。

下の資料は弘化2年(1845)の「伊勢参宮道中日記」(筆者不明)で、伊勢参宮への途次、江の島へ寄った際の記述です。江の島に着いたのは6月20日(旧暦)で、天気は雨。島内の海士について、「○(金銭を指す印)次第にて海にくぐ(潜)りて あわひ(鰐)さへ(栄螺)など取りてくる者有り」と記していて、海士(男性)の「潜り(もぐり)」の実際が判ります。浮世絵にはしばしば釣りをする客の姿が見られますが、釣竿を24文(400円くらい)で貸し出していたことも判ります。

また、昼食は、ゑびす屋吉右衛門(現在の御料理旅館 恵比須屋とは別)で、イナダ(鰻)の味噌煮、スズキ(鱸)の刺身・スズキの鰯かけ、アワビ(鰐)貝焼などを食べています。この時はスズキが豊漁だったのででしょうか。ちなみに、このときの値段は、一人前、銀2匁(現在の2,500円くらい)でした。



「伊勢参宮道中日記」弘化2年(1845) ※下段は、読み下し文)

江の島へ 志里 三丁
入口より南側、皆料理屋
なり、町幅せまし
坊宿(御師宿)もあり、この節
御開帳也、しかれども
今日は雨天のためか
参詣なし、拝所数ヶ所
あり、中の宮より下り也
見せ(店)多し、南東の方
へ下る 大岩屋、奥行
二丁有りと言ふ 奥の院(宮)なり
大日如来也 奥の院、穴二つ也
この前にて、○(お金を表す印)次第にて海に
くぐ(潜)りてあわひ(鰐)さへ(栄螺)二つ
など取りてくる者有り
同所釣竿かし(貸)あり
二十四文づつ預かりて
釣り致す、島めぐり
卒(終)わり つひて(次いで)四・五丁
つり、二百文分くぐ(潜)ら
せる、あわひ(鰐)二つ さへ(栄螺)二つ
取てくる き(奇)妙也
屋宿
ゑびすや(屋吉右衛門)
中飯一人前二匁(もんめ)つゝ也
本せん(膳)
汁 いなだ(鰻)味噌煮
皿 糸きり(胡瓜)
刺身すゝき(鱸)
猪口 酢味噌入
平 すゝき(鰻)
長皿 すゝき(鰻)あん掛け
あわひ貝焼
香のもの



『浮世絵の技①』摺りの技術「ぼかし」の技

「拭き下げ」ぼかし



「拭き上げ」ぼかし

秋になって、空が高くなりました。夕焼け空も美しくうごきますねえ。冬になると、空気が澄んで、浮世絵館からも富士山が良く見えるようになります。浮世絵も、空の表現に工夫を凝らしているんでございますよ。

この絵は12月18日から展示の「東海道五十三次名所図会（通称「竪絵東海道」）南期の松原左り不二」でございます。絵の一番上の部分が濃い藍色で、下に行くほどぼやけてまいります。これを「一文字ぼかし」と申します。「ぼかし」は色の濃淡によって境界を曖昧にするので、空気遠近法の効果がございます。歌川広重の作品のほとんどに、この技法が用いられておりますよ。この絵では、底辺にもぼかしが使われていて、上部のぼかしを「拭き下げ」、底辺を「拭き上げ」と呼びます。手前から奥へ道が続くようでございますよ。

幅を均一にして一文字にぼかすことも、何百枚摺っても同じようにぼかすことも、摺り師の熟練した技が要求されます。

それから、富士の三角、山々の三角、屋根の三角、松の三角が、リズムカルに遠近を作り、ちょっと高い所から旅人を俯瞰するようになっていきます。たくさんの仕掛けが、「遥かな旅空」に想像を巡らせるのでございましょう。広重が込めた思いと、鑑賞者の発見や経験や気持ちが重なり合って、初めて、作品がでか上がるように思うんでございますよ。ちょっぴり妄想力も手伝うと、旅人の話し声も聞こえるようございましょうか？

ところで、富士山が白く冠雪しているところを見ると、初冬から早春かと思われそうですが、そこは浮世絵の一筋縄では行かないところ！奉納する大山太刀を持った人も見られ、山開きの初夏の頃とも考えられます。いやあ～、広重さんに会うことが出来たら、この仕掛けについても聞いてみたかったなあ。



編集後記

今回紹介した歌舞伎組上燈籠の世界はいかがでしたか。江戸時代の庶民文化を伝える浮世絵にはさまざまな表現があり、その広大なジャンルのひとつを知っていただける機会となれば幸いです。今年は、明治から150年目の年でしたが、江戸時代は約260年間ですので、年数が追いつくだけでもまだ100年ほどあるのです。だからこそ、いまだに私たちを楽しませてくれる文化の蓄積があるのだと思います。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階

【電話】0466-33-0111 【FAX】0466-30-1817

【開館時間】10:00～19:00（入館は18:30まで）

【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）

※その他、展示替えのための休館日がございます

【HP】[藤沢市藤澤浮世絵館](#) で検索Q



facebook：藤澤浮世絵館
公式アカウント

やこのマークが目印です。「いいね!」
お願いします。